

技術委員会より

技術委員長
(株)メイト
長谷川 佳右

2020年度(令和2年)の技術委員長を拝命いたしました。昨年委員長に推薦され承諾した時は、大変な役目をいただいたとプレッシャーを感じておりました。しかし、いざ2020年が始まるやいなやコロナ感染症により、世界は一変し、BM協会でも技術例会、寺子屋BM塾、各委員会活動も中止となり、私自身ほとんど活動しないまま9月を迎えてしまいました。

コロナ感染症も、世界で200カ国に広がり、感染者は3000万人を突破し、93万人以上が死亡しています。日本国内は欧米に比べるとその数は少ないと言われていますが、それでも7万7千人が感染し、1480名ほどが死亡するという本当に感染症が世界を覆うSFのような世界となっています。

感染防止のため、今まで普遍にあった会議、講演、展示会等、多くのコミュニケーションの機会が自粛、禁止などで中止されました。我々の身近での会社同士の打ち合わせなども直接の対面は難しく、製品開発などでの停滞も多く発生していると聞いております。この状況においてビジネスのオンライン化が急速に進んでいることを実感しております。弊社でも出張、来社原則禁止で、会社同士の打ち合わせはほとんどがオンラインとなっています。

以前からIT、ICT、DXが今後の日本社会の発展に必要とメディアなどで言われておりました。しかし、多くの企業で遅々として進んでいかなかった印象があったと思います。コロナを機にIT技術が急速に社会に浸透しており、テレワークやリモート出勤などが普通の言葉として報道されております。

この状態に鑑みるに、中世ヨーロッパに於いてペストの流行により、多くの人が感染防止のために活動停止状態の中で、文化が醸成され後のルネサンスのうねりに繋がっていった話にも重なり、未曾有の大災害でもそれを機に大革新とも言える文化が花開くという人類のしづとさを表しているのではと思います。最近言われるアフターコロナの世界は以前とは何かが出来ないというのではなく、制約によらず、もしくは制約を活かしてよりよい社会を作り上げることを考え実行して行くことで理想の社会へ進化していけるチャンスなのかもしれないと前向きに考えたいと思います。

我々BM協会の使命の一つとして、世の中の新しい技術を業界に紹介することがあります。しかし、春以降2つの技術例会は自粛し、委員会も開けずメールのやりとりだけでは今後の方針もなかなか決まらない状況でした。技術委員会では、こんな状況でも情報発信を行っていか

ないと協会としての意義が失われると、何らかの方法でも発信していかなければ、とくに協会の最大のイベントであるシンポジウムをなんとか開催したいとの希望が大きくなってきました。しかし、今まで通りの会場での講演というのはリスクが高く難しい。そこで、世間の流行に乗り、オンラインでのテレビ会議やウェビナー等の形式で行うことを検討することとなりました。技術委員会も市販のウェブ会議システムを使い、実際に会議を行うことで、まずはウェブ会議とはどういうものか確認しました。また、委員の中には会社や他の団体での講演会などでの経験があり、そのやり方なども参考にさせていただきました。その中で一度講演を模した会合を行い、使い方などを試してみ、なんとかやれそうとの感触を得ました。これらに関しては大森事務局長を中心に各所に交渉など奮闘していただき実現にこぎつけました。ありがとうございます。また、中止になっていた寺子屋BM塾もこの方式にて実施できるかを検討し、元々予定されていた山本日登志先生にオンラインでの講義についての可否を打診した所、ご了承いただいたので、元々の予定より1ヶ月遅れで実施することとしました。チラシも作成し、申込受け付け中ですので多くの方のご参加をお願いします。

講義内容とスケジュールについて

- ・ 第28期 寺子屋BM塾
 - ・ 講師 山本日登志(ネオジコンサル)
 - ・ 10月16日「永久磁石の基礎」
 - ・ 11月20日「永久磁石測定法1」
 - ・ 12月11日「永久磁石測定法2」
- シンポジウムもオンラインにて実施すべく準備を始めております。5月の技術例会にご講演いただく予定であった先生方を中心にオンラインにて講演をしていただけるか交渉中です。

オンラインでの講演会は慣れないため講師の方々にも、参加される方々にも、色々ご迷惑をおかけしたり、ご不満を抱かれたりすることがあると思いますが、何卒寛大なお気持ちでご参加いただき、良い点、悪い点など忌憚なくご指摘いただければ、次にもっと進化した講演会を開くための糧にしたいと思います。希望を申しますと、オンラインなのでここまでしか出来ないと言うのではなく、オンラインならではの有利な点を活用した講演会となるよう、例えば質問形式、情報交換等色々工夫できればと思います。ただ、毎回ご好評を頂いております懇親会は寺子屋塾、シンポジウム両方とも残念ながら開くことは非常に難しいと思われます。講師の方、参加者の方々との交流を楽しみにされていた方々には誠に申し訳ございません。

将来的には、以前の実際の講演会に戻すだけでなく、オンラインの良いところを融合した情報発信が出来れば、さらなる情報発信と会員の交流が活発になるのではと思います。

さて、暗い話題の多い中、明るい話題の一つとして将棋の藤井聡太棋士が史上最年少でタイトル奪取、2冠達成、八段昇進を達成されました。その背景について、棋聖を獲得されたときにテレビにて特集をして何が棋聖を取る力と

なったかを解説されていました。

最近では対局者も藤井棋士を研究し、いくつかの弱点を攻められ、プロになった最初の頃の破竹の勢いも衰えスランプの状態だったそうです(それでも強かったです)。今年になって記録達成の期待が高まっていましたが、コロナの影響で殆どの対局が中止となり、記録達成も難しいと言われていました。その2ヶ月ぐらい対局が出来なかった時期に藤井棋士はまず、自分の弱点を見つめ直したそうです。終盤は圧倒的な強さがあるが、序盤中盤での不用意な一手が最後までひっくり返せずに負けることがある。それを克服するためにAIを使い、序盤、中盤での一手一手のAIの評価を確認し、なぜそうなるかを繰り返し突き詰めていったそうです。いままでの藤井棋士の対局では途中不利になっても終盤逆転することが多くあったのですが、自粛後、対局が再開された後は序盤、中盤から優位に進める圧倒的な勝ち方が増えていき、ついには2冠を達成されました。

最近の対局では、AIが手順を読んで解析し最適手を予想します。勝負の趨勢が数字で表されるようになり、素人でもどちらが優勢かわかるようになっています。藤井棋士が対局においてそのAIの予想の上位に出てこない手をうち、これは悪手かと皆が思いましたが、その後、対局は藤井棋士の優勢のまま勝利しました。その場面でAIが候補手を出すために読んでいた手は2億手を読んだもので、これが6億手を読み込んで解析したとき藤井棋士の手が最善手に上がる手でした。

これは天才揃いの棋士の間でも驚きの手だったようです。そしてそんな場面がその後もいくつか出るに当たり、これはAIを超えた驚異の天才と絶賛されました。

最近のAIの進化の速度がどんどん速くなる中で、いずれAIが人間の仕事を奪ってしまうようなAI脅威論が言われて久しくなっています。しかし、人の身にしてAIを駆使し、AIの解を超えて人を魅了する対局を見せてくれたことに、人とAIの関わりにおいて明るい未来への希望を示してくれたと思います。

藤井2冠の話は、制限や不遇がある状態でも自分の技術をひたすら磨き、工夫し、諦めない勇気で準備を怠らなければ条件が悪くてもさらなる発展が出来ること。AI等の技術に使われるか使いこなすかとう問題は、人にこそ可能性があることを認識させてもらいました。AIを道具として使いこなせれば人々を感動させる大きな力になる。我々も技術を以て社会に貢献していく中で、技術を発展させるとともに技術を駆使して社会に役立たせ発展させていく使命も気づかせていただいたと思います。

最後にまだまだコロナの終息の目処も見えそうもない現状ですが、皆様にはご自愛いただきお互い健康で過ごせるよう頑張りましょう。いつか、交歓会などでお会いし、技術やいろいろな話で盛り上がり、美味しいお酒が飲める日が来ることを楽しみにしております。